

第142回 令和7年12月11日（木）

「寒さについて。」

だいぶ気温が下がってきました。このところの傾向を見ると、2月の後半は春めいた日もチラホラ出てきて、梅の花も咲き始めるので、12月から1月いっぱい1年で一番寒い時期かもしれません。

昔は冬のほうが夏より長かったので、9月には秋風が吹き始め、下手をすると4月でも寒の戻りでストーブが欲しい日があったりしました。夏ですら夕方には涼しい風が吹いていて、窓を開けばなしで寝ると夏風邪をひくといわれたものです。

いまは10月半ばまで30度を超えていて、4月には夏日が散見されますから、暑い日々のほうがはるかに長くなってしまいました。

氷河期が終わって間氷期になり、1万年以上続いた縄文時代から人間にとって「冬を越す」というのは命がけのことでした。冬眠できる動物はいいのですが、そうではない人間は冬の間も食料を確保しなくてはなりません。日暮れは早いし、動物はなかなか見つかりません。雪に閉ざされれば白い動物はなおさらみつきにくくなります。

農業が伝わってから冬を越すことが格段に楽になったと思いますが、それまでは地獄のような季節だったと思います。縄文人の寿命は平均で30歳弱だと言われています。小さい子供が生き延びる確率がかなり低かったと推測されますが、大人にとっても過酷な季節であったことでしょう。

現代において人間は寒さに敏感です。基本的には寒いと服装や暖房器具ですぐに対応します。山で遭難をしない限り凍死することなどめったにありません。高齢者も寒いほうが暑いより気づきが早いような気がします。

反対に熱中症で亡くなる高齢者が後を絶たないのは暑さに鈍感だからです。いまは暑いことも命を脅かすので速やかに冷房にあたる必要がありますが、凍死ほど命の危険を感じないのが現実で、そのため暑さで犠牲になる人数は多数に上ります。

これは人間にとって熱さより寒さが死に直結していたことの証拠だと思います。私も寒いのが大嫌いなのですが、現代は夏も冬も命がけになってしまいました。